

林のなかで

残暑も過ぎ、セミの声にかわり草むらの虫たちが涼しげに鳴く季節となりました。

わたしたちの町には、どんな虫や草木たちが生きているのでしょうか。

西原町は沖縄戦当時、激戦地であったため、山野はすべて焼き払われてしまいました。また、戦後は那覇市のベットタウンとして、丘陵などを造成し、新興住宅地が建設されてきました。現在、自然の残された場所というと、宅地化されにくい傾斜地や、集落の聖地（御嶽や拝所など）に限られています。

戦後復興した若い林には、ギンネムやモクマオウ、ソウシジュといった比較的新しい外来種も混じっています。林のなかをよくみると、植物たちが競争しながら生きているようすが観察できます。ギンネムは、熱帯アメリカ原産で成長がはやく、明治時代にはいつてきた植物

です。このギンネムは、ミモシンという毒素を排出するため、他の植物の成長を阻害させてしまいます。つまり、ミモシンを利用して、他の植物を排除し、ギンネムの群落を形成してしまうのです。



ギンネム林の下に草は生えていない

このほかにも、リュウキユウテイカカズラという植物は、暗い林のなかでは、二〇〜三〇センチほどの高さで、花も実もつけずに暮らしています。しかしひとたび台風などによって、林のなかに光がさすと、太陽めざして高い木をつたって成長します。高い木などに着生すると、花を咲かせ、高い場所から実をばらまくのです。子孫を残すための知恵をもっているんですね。また、ハマイヌビワは、他の木たちがいやがる崖地

といった悪環境でもたくましく成長するため、急な斜面地では幅をきかせています。

町内の傾斜地などの林を丹念に調査していく中で、みつめましたよ！

西原の古木・大木ともいうべき木々たちを。

写真の木は樹齢一五〇年はあるであろうタブノキです。激しい戦災のなかをかくくって生き延びていたのです。



樹齢およそ150年のタブノキ

さらに、もうひとつは、根元から9本の枝が伸びているタブノキですが、きつと戦争で上部を焼き払われたあと、新しい枝が伸びてきたのでしょうか。

このタブノキをみつけたときには、「西原の自然も捨てたもんじゃないわ」と林のなかでうれしく思ったのでした。